

オーガニックマーケットを活用して 有機農業を広げる



- 1 オーガニックファーマーズ朝市村の概要
- 2 オーガニックファーマーズマーケットを活用して
有機農業を広げる
- 3 有機農業を広げるために解決したいこと

1 オーガニックファーマーズ 朝市村について

オーガニックファーマーズ朝市村

毎週土曜 8:30～11:30

目的:有機で就農したい人・有機で就農した人
たちを支援

2004年10月 朝市村開始 月2回開催

2009年5月 毎週開催に移行

2016年3月 日本農業賞「食の架け橋」部門
大賞・農林水産大臣賞

2016年12月 愛知農業賞(担い手育成部門)



名古屋の中心街、栄に位置する都市型公園「オアシス21」

名古屋市が52.5%、残りを中部電力・名古屋鉄道・三菱東京UFJ銀行（立ち上げ当時は東海銀行）などの地元関連企業が出資して設立した第三セクター「栄公園振興株式会社」が運営。

開催経緯

● オアシス21

2002年開業。「にぎわい」創出・
「名物づくり」を求め、朝市開催を希望

● 私

有機農業による新規就農者の売り先と
消費者との出会いの場を模索



2004年10月に朝市村開始

続く形にするために 1

都市公園オアシス21

+

朝市村実行委員会による「共催」という形で運営



続く形にするために 2

出店料収入だけで運営



出店料は机1本2000円。
新規就農者が参加しやすい価格設定。



続く形にするために 3

農家が自分で栽培したものだけを
自ら販売することを徹底



メンバーの農家

朝市村メンバーになる前に
田んぼや畑を農家と責任者が確認。

家族で農業を営む小さな60の専業農家。
有機JAS認証を取得しているのは1軒。

1回あたり15～35農家が
畑の状況に合わせて出店。
(コロナ後は平均20農家)



コロナ以前の朝市村



コロナ後の朝市村…来客数は減ったが、全体の売り上げは横ばい。農家ごとの売り上げは上昇。名古屋市内への宅配増加。

2 オーガニックファーマーズマーケットを 活用して有機農業を広げる



オーガニックマーケットを活用して有機農業を広げる 1

有機で新規就農した農家の 販路開拓・マッチング



オーガニックマーケットを活用して有機農業を広げる 2

中山間地に就農した有機農家と
都市の消費者が、つながり交流する



オーガニックマーケットを活用して有機農業を広げる 3

消費者が農家で農業体験をする 畑の入口



オーガニックマーケットを活用して有機農業を広げる 4

毎週開催で オーガニックを日常に



オーガニックマーケットを活用して有機農業を広げる 5

農家が納得いく価格で 情報を載せて販売



有機の農産物は、情報を載せて、直接お客様に手渡すことが大切。リピーターや顧客づくりにつながる。
自分たちの生活に影響するので、安売り合戦にはしない。



オーガニックマーケットを活用して有機農業を広げる6

仲間の有機農家と 切磋琢磨しながら技術を磨き 新規就農者が技術を身につける



オーガニックマーケットを活用して有機農業を広げる 7

子どもボランティアとして関わることで 食に関心を持つ



オーガニックマーケットを通して実現できること 8

さまざまな形で 「小さな農家を育てる」

2019～2028年 国連 家族農業の10年



オーガニックマーケットを活用して有機農業を広げる 9

研修受け入れから就農後のサポートに至る 新規就農希望者の支援





有機農業での新規就農相談コーナー 2009年開始

新規就農者の育成…10年間で50人以上の 新規就農者を育成



オーガニックマーケットを活用して有機農業を広げる10

ファーマーズマーケットを通して 就農した人たちが、地域の新しい力になる



3 有機農業を広げるために 解決したいこと



なぜ、有機の面積が広がっていないのか

- ・農地を広げたくても広げられない面もある。
現在でも農地は借りにくい。特に有機の場合は難しい。
- ・農業は土の質・日当たり・水の確保・水はけなど農地が持っている条件によって左右されるが、新規就農者が貸してもらえるのは条件不利地だけという場合が多い。
耕作放棄地を苦労して開墾して、
ようやく農地を確保する人も多数存在している。

なぜ、有機の面積が広がって行かないのか

- ・地域の産業から農業を切り捨てようとしている地域がある。

使われていない農地があって、その地域での就農を希望しても、「担い手は足りている」と言われることも。

正式に借りられなければ、
さまざまな支援を受けることができない。

- ・有機の新規就農者が多く入っている地域では、トラブルを未然に防ぐために、周囲の人が協力的に見守ってくれる農地とそうでない農地を事前に色分けしてから、紹介している例もある。

有機の面積拡大に向けて

借りた家の周囲が集落営農の地域で、
田んぼを借りることができず、
オペレーターとして地域の田んぼの世話をしてきた
新規就農者がいる。

就農後10年経ち、地域の農家が高齢化し
後継者もないことから、
集落営農の田んぼを彼に貸して、
有機でやってもらってはどうかという
話し合いがはじまっている。

非農家からの新規就農者に必要なことは

非農家から就農する人には基盤がないので、
全般的な支援が不可欠となる。

機械・施設は必須の基本装備。

整えるには、資金面の支援制度が重要。

40代以上であれば蓄えもあるが、

20代で就農したいと志す人は借金も難しく、
支援が必要となる。

現在の制度は短いスパンで要件や運用が変わり、
就農希望者は振り回されがちな状況にある。

育てる人をどう育てるか

研修受け入れ農家も、高齢化で減っている。
若手の農家は自分の生活に追われ、
研修生の受け入れは難しい。

小さな農家に頼る研修では限界がある。
有機農業を学ぶことができる
学校のような組織が必要となっている。

慣行農家の子弟が、 就農時に有機農業への転換を 希望する例が増えている

地域の理解を得ることが前提になるが、
優良な農地を継承し、
栽培技術を持つ親が近くにいることで、
力量のある有機農家が生まれる可能性は高い。

